

常日頃から考えているべきだと思います。  
〈東京都獣医師〉



私が現場で10年以上かかわってきてすごく感じることは、非常に難しいことが多いです。それはたとえば、大規模の学校ならばたくさんの先生がいてよいのですが、単学級とかの小規模の学校の場合、われわれが先生方からお話を伺う限り、すごく実践が難しいことがあります。実際に獣医師として限界を感じてしまうことも多くあります。そういう意味からは、今日の石井先生のお話などはすばらしいと思いました。確かに私たちはカブトムシの病気は治せないかもしれませんが、生きているものに接することが大切なのだと言うことがわかりました。命の教育とは言いますが、これを失敗してしまうと命を粗末にする教育になりかねません。現場に行ってみて、たとえばニワトリが飼われていたとして、これを教材として、どのようにすれば命を大切にする教育が実践できるのか、いつも悩んでしまうところがあります。ですから、日の当たらないところで悩んでいらっしゃる先生方が、本当はこういうところでお話いただけるとよいと思います。成功例だけだと、皆さんが納得して終わってしまうので、そうではない部分の意見を聞きたいと感じました。

〈小林〉

時間を少し超過してしまいましたが、最後に宮下会長から皆様にお話しさせていただきます。

〈宮下〉

熱心なご討議ありがとうございました。

今日のメインテーマとかかわることですが、先ほど中川先生からもご指摘がありましたが、研修会を開いても管理職が参加しないということがあり、なかなか円滑にことが運ばないということがありました。丸山先生もそのようなお立場にあるわけですが、はじめは積極的でなかったというお話も先ほどしていただきました。それから、久喜市の教育委員会の山本先生のお話を伺って、久喜市では非常にスムーズに各学校に浸透しているとい



うように受け止められました。それでは、なぜそのように浸透しているのか考えてみましたが、その辺のところを後でお聞かせいただけたらうれしいと思います。

各学校では、来年度の予定をプランニングして、3月末までに提出しなければならないわけですが、そのとき、各教育委員会で教育課程の編成についての講習会を行っているのではないかと思います。その中で、重点になる取り組みをどうするのか、伝達されているのではないかと思います。そのときには、各学校から教頭先生など複数の先生方が出席されて、講習を受けられるのではないかと思います。そのときに、動物飼育をどのように教育課程に位置づけるのかということが示されて、各学校でその取り組みをされることになるのだと思います。そのような場所で、今日のようなことを語っていただければ、管理職の先生方にも浸透していくのではないかと思います。このように、もっともっと教育委員会と連携して、活動していく必要があるのではないのでしょうか。

この研究会も、毎回テーマを設定して、そのテーマのもとにこのような討論を行っていますが、管理職の先生の理解という課題が毎回のように出されます。久喜市では、教育委員会とうまく連携して学校を動かしているように思えますが、その辺のことについて、少しお話しただけると助かります。

〈小林〉

教育課程への位置づけということで、会長からお話をいただきました。教育委員会としての立場から、山本先生一言お願いいたします。

〈山本〉

確かにその通りでございます。私は、校長会も教頭会も出させていただきます。もう一つ教務主任会というのも掌握しております。その中で、動物飼育だけではないんですが、教育委員会と学校が密に連携を行い、学校を教育委員会がバックアップしていく体制をとっています。そこで、教



育委員会で行っている施策をどうぞ利用してください。獣医さん、こんな考えでやっています。ということをお話するたびに言っています。そして、市の重点施策として、動物飼育指針を管理職研修で示しています。あとは、教育委員会に言いにくい、たとえば、避妊とか手術とか、そういうことについて、確かに予算の制限はありますが、学校から遠慮なく言ってもらえるような体制を作ることが大切だと思います。

#### <小学校教員>

今すごくいい時期だと思います。命のことが取りざたされていて、学校現場もそれに追いつまわられています。しかし、このようなことが表に出ているということは、すごくいいことだと思います。しかし、学校現場から教育委員会を見ていると、ただ追いつまわられて対処するだけで精一杯で、この状況をうまく使うというような余裕がないように思えます。であるとすれば、われわれ学校現場の教員が、このようにやっていけばよいのではないかなというように、提案していくことが必要なのではないかなと思います。われわれがまさに子どもたちの前に立っているのだから、子どもたちの前でこうすることが命の教育につながるんだということを言っていかなければならないと思います。ただ、われわれ教員は、システムとしてどういうことが構築されているかが見えない状況にあります。だから、それを何らかの形で伝えてほ

しいと思います。中川先生たち獣医師の方々には言っていただいているのだと思いますが、先ほどお話がありました、いわゆる陰になっている先生方には伝わっていない現状があります。現場は現場のセオリーで進めていくしかないのです、何らかの方法でどのようなシステムがあるのか伝えてほしいと思います。

#### <中川>

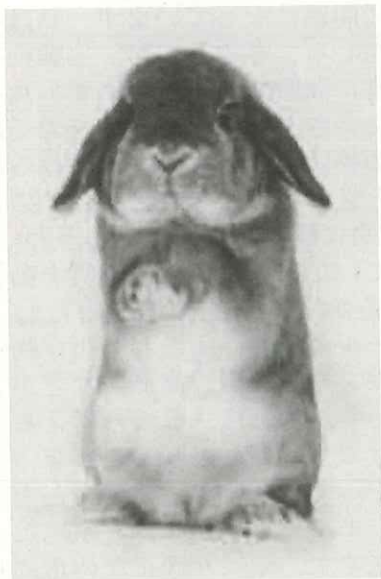
先ほどから、命の教育といわれていますが、命の教育をするには実感しかないんです。命の大切さを言葉で教えても伝わりません。自分がかわいがっていた動物に死なれたときに初めてわかるんです。そういう環境を整えることを行っているのであって、「命を大事にしろ」と言葉で教えているのではないということです。

#### <小林>

どんどん白熱してまいります、時間が大変延びてしまいました。

私たちは学校の飼育動物をどうしようとしているのではないということが、今のお話でよくわかったかと思います。やはり、子どもたちの心をどうしていったらいいのかということが、皆共通した考えかだと思います。子どもたちの健全な教育をするために、今私たちは頑張っているんだということだと思います。

いろいろなご意見をいただき、たいへんありがとうございました。





## ま と め

唐木英明

ご紹介いただきました唐木でございます。時間がないので簡単に3つだけお話をしたいと思えます。

第一に、学校で動物を飼うことは子どもの感性の発達に非常に有用であるということは、われわれは感覚的にわかっています。しかし、このことは証拠にはならないのです。というのは、感覚というのは個人差があって、私はそう思わないという人もいるわけです。ですから、私たちは、動物を飼育することが子どもの感性の発達に有用であるということを科学的証拠を添えて説明しなくてはなりません。そういう意味で、この会にはそういう証拠を集めるという非常に大きな目的もあるわけです。今回私が非常にうれしく思ったのが、先ほどの中島さんの発表です。これは初めてここで示された科学的データでして、数量的に有用であるということが証明されたものであります。しかしまだこれは始まったばかりだと思いますので、今後は是非充実していただいて、本当にこういう証拠があるということを添えて、皆さんに説明していく必要があると思います。もちろん、各学校で実践されていて、こういうよいことがありますという報告も大変大切です。しかし、下手をすると、「私には効きました」という偽健康食品のようにもとらえられかねないということです。やはり、数量的に証明できることをわれわれはこれからも集める努力をしなければいけないということです。

第二には、今日の発表の共通メッセージとして、体験しないと身に付かないことがあるということです。たとえば、動物の世話をする中でかわいいという感覚が生まれてくる。かわいいということはいくら教えられてもわかるわけがないことです。動物を育てて初めてかわいいという気持ちが起こってくるわけです。小さいものをかわいいと思うことは、実はこれは本能なんです。ですから、人間は共通して小さいものをかわいいと思う本能を基本的にはもっています。しかし、本能というのは、目の前に小さいものが現れないと、かわいいという本能も現れてきません。目の前のかわいい動物を飼うことによって、われわれはその動物に愛着を持つし、責任感も生まれてきます。そして、それをよく観察するようになります。そして、その愛着ということも本能で、これがあるから子育てができるわけです。愛着をもって責任感をもって世話をする。そして他者を思いやるということが利他行動とって、道徳や倫理と呼ぶことができるわけですが、この道徳や倫理も本能で



あるということは皆さんにもよく知られていることであります。これも実践があって初めて心の中に芽生え、理解ができてくるわけです。要するに、われわれはいろいろな本能をもっているのですが、それが形として、行動として表れるようになるためには、目の前に対象がいなくてはいけないということです。その対象として、動物を飼育するという事は、非常に大切なことと言えます。

第三は非常に現実的な問題ですが、人間の世界でも肥満が問題になっています。これがペットの世界でも非常に問題になっています。私は何十年も実験動物に携わってきましたが、実験動物でもこのことは非常に問題でした。いつでも食べられるように動物にえさをたくさん与えておくわけです。24時間動物はそのえさを食べ続けるわけです。そうすると必ず肥満になります。そのようにして、生活習慣病に動物がなってしまうわけです。私たちが行っていた実験は、化学物質を動物に与えて病気になるかどうかを調べていたわけですが、コントロールの動物、すなわち化学物質を与えない動物にガンや心臓病、高血圧などがどんどん出てくるんです。それは、今から考えると食べ過ぎだったわけです。これと同じことを、今の学校飼育動物でやっていないかということを考えていただきたい。モルモットが1 kg 超えたら、これは完全な病気です。やはり適正な体重にしておくことが大切です。かわいがるといいう中に、適切な量のえさを与えるということも考えていただきたいということです。

以上3点を私のまとめとさせていただきます。どうもありがとうございました。

(東京大学名誉教授／日本学術会議会員)